

「布施」ときくと、みなさんは僧侶に渡す御礼を思い浮かべることがほとんどだと思います。確かにそれはその通りなのですが、それだけが布施ではありません。そこには想像しているよりはるかに広い世界があるのです。

道元禪師が著した『正法眼蔵』という書物があります。この中に、在家信者のために書かれたと考えられる「菩提薩埵四摂法」という項目があります。これは、「菩薩が行う、生きとし生けるものための四つの行い」という意味で、「布施」・「愛語」・「利行」・「同事」という四つが説かれております。

菩薩とは、地藏菩薩や観世音菩薩などに代表される仏さまのことです。自分だけでなく、あらゆる苦しみから人々を救おうと誓いを立てて、仏教の修行を続ける仏さまをいいます。そのお誓いの中の一つ、四摂法の中の第一番目が「布施」です。

布施は、古くから伝えられてきた大切な修行の一つです。布施の種類には、大きく分けて、財施と法施と無畏施があります。財施とは、物を他者に分け与えることで、お寺や僧侶への寄進はここに含まれます。法施とは、仏教の教えを施すことで、宗教儀礼や法話などがこれにあたるでしょう。無畏施とは、畏れを除いて精神的な安定を与えることをいいます。優しい言葉や柔和な表情も、相手の心を和らげる無畏施になるのです。

このように、布施にはいろいろな種類があるのですが、道元禪師は、布施のことを「むさぼらない心」とであると、一言で言い表しています。

財施でも、法施でも、無畏施でも、そこに「むさぼり」があったなら、それは布施ではなくなるということなのです。布施における「むさぼり」とは、例えば、自分の欲得のために贈り物をする心であったり、見返りを求める気持ちだといえるでしょう。

それらから離れて「むさぼらない心」を持つ時、私たちの生活すべてが布施となるということを道元禪師は示されているのです。

そして、大切なのは、布施する物や自分の行動が、たとえささやかなものであっても、それがその人のためになり、その人の心を打つことを第一に考えることだと、道元禪師はおっしゃっています。

このように、「布施」には広く深い世界があるのです。私たちも「むさぼらない心」を基本とした「布施」の実践に、つとめてみようではありませんか。